

Humanscapeから読み解くコミュニティのかたち メキシコ・シティ旧市街における十字架の道

西村 亮彦¹

¹正会員 工博 国土交通省 国土技術政策総合研究所 社会資本マネジメント研究センター
緑化生態研究室（〒305-0804 茨城県つくば市旭1番地, E-mail:nishimura-a92ta@mlit.go.jp）

街路や広場をはじめとする都市の公共空間は、都市に暮らす人々のライフスタイルやコミュニティのあり方が表出する場であることから、公共空間を舞台に繰り広げられる人々のアクティビティに、都市の本質を見出すことができる。コミュニティのかたちを読み解く上で、鍵となるのが「Humanscape」（人の景）である。都市空間において繰り広げられる出来事を具に観察することで、そこがどのような性格の場所であるか読み解くことができると考えられる。そこで、本研究ではメキシコ・シティ旧市街の各教会において復活祭（Semana Santa）の聖金曜日に行われる十字架の道（Vía Crucis）を対象に、Humanscapeの調査・分析を通じて、コミュニティのかたちを読み解くことを試みた。調査・分析の結果、巡礼のルートや規模、留の設置場所や形式、祭壇の装飾、演出の工夫などから、教会を核とした各コミュニティの領域や特徴を明らかにした。

キーワード: Humanscape, 人の景, コミュニティ, 復活祭, メキシコ

1. はじめに

(1) 研究の背景

スペインの都市計画家Jordi Borjaは、「都市とは、街路に集う人そのものだ」と言った。街路や広場をはじめとする都市の公共空間は、都市に暮らす人々の生活様式やコミュニティのあり方が表出する場であり、公共空間を舞台に繰り広げられる人々のアクティビティこそ、都市の本質であると言える。

コミュニティのかたちを読み解く上で、鍵となるのが「Humanscape」（人の景）である。都市空間における人々のアクティビティを具に観察し、「出来事」の背景を理解することで、そこに暮らす人々の生活様式、ひいてはその場所がどのような性格の地区であるかを読み解くことができると考えられる。

本研究では、メキシコ・シティ旧市街の各教会において復活祭（Semana Santa）の聖金曜日に行われる十字架の道（Vía Crucis）を対象に、Humanscapeの調査・分析を通じて、コミュニティのかたちを読み解くことを試みる。研究を行うにあたり、2014年4月18日、旧市街に位置する教会が実施する十字架の道、20件について観察調査を実施した。

調査の結果を踏まえ、巡礼のルートや規模、留の設置場所や形式、祭壇の装飾、演出の工夫などから、教会を核とした各コミュニティの領域や特徴を明らかにする。

(2) Humanscape（人の景）

地形や気候・風土をはじめ、土地の持つ力が実空間において顕在化したものをLandscapeと呼ぶ。これに対し、生活様式や風習をはじめ、人間集団が持つ「生き様」が実空間に顕現化したものを、本稿では「Humanscape」（人の景）と定義したい。

Humanscapeとは、都市空間を舞台に人々が繰り広げるアクティビティが織り成す、集団としての「出来事」が視覚化されたものである。以下、試論のレベルではあるが、Humanscapeの分析手法について、概念的な整理を行いたい。

近年、わが国でもPlacemakingの概念が徐々に普及する中、生きた公共空間（vibrant public space）の創出に向けた様々な取り組みが実践されてきた。こうした状況の中、ウィリアム・ホワイトやヤン・ゲールらによって体系化されてきたアクティビティ・リサーチを用いた調査・研究が、わが国でも散見されるようになった。観察調査を基本とするアクティビティ・リサーチは、人間行動を個体レベルの身体感覚から理解するための調査手法として、功を奏してきたと言える。

一方、社会学の分野では、吉見俊哉らの盛り場研究をはじめ、都市を演劇に見たて、都市空間を舞台に市民が繰り広げる生活・活動を「出来事」として捉え、その背後にある秩序や社会的関係性を読み解く試みが、かねてより行われてきた。これらの研究は、都市における人間行動を、個人の身体感覚に基づく振舞いのレベルを超え

た、集合レベルの出来事として捉えようとしている点において、特徴的であると言える。

本稿では、メキシコ・シティ旧市街における十字架の道を対象に、集合的なアクティビティの観察調査を実施し、各コミュニティの社会集団としてのアイデンティティを解読することを試みたい。（図-1）

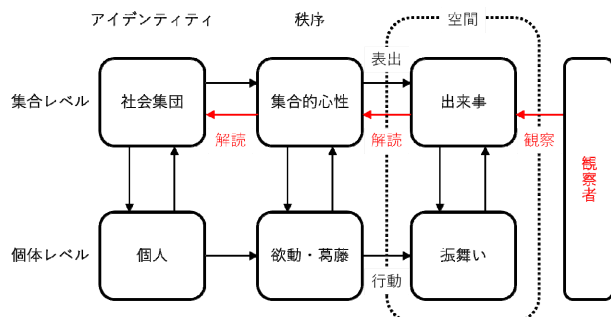


図-1 本稿におけるHumascapeの読み解き方

2. メキシコ・シティ旧市街の現況分析

(1) 人口動態・分布

メキシコ・シティ旧市街は、カテドラル、国立宮殿、市庁舎に囲まれたソカロ広場を中心に、19世紀初めまでに市街化された2.97km²のゾーンAと、その外側の20世紀初めまでに市街化された7.31km²のゾーンBから構成される。（図-2）現在、ゾーンAには約3万人、ゾーンBには約12万人が暮らしている。

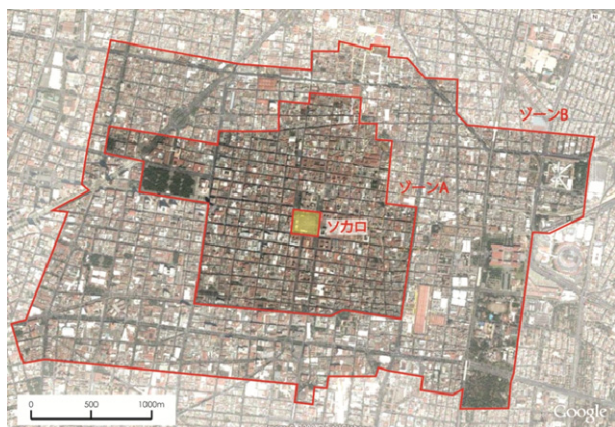


図-2 メキシコ・シティ旧市街の範囲

植民地時代より、市の機能的・象徴的中心としての役割を果たしてきた旧市街だが、1950年代より各種機能が他の地区へ転出するのに伴い、人口流出が始まった。1970年代には人口流出が本格化し、これに1985年のメキシコ大地震が拍車をかけることとなる。1970年にはゾーンA・B合わせて35.5万人だった人口が、2000年には15.5万人にまで減少し、30年間で実に56%の減少率となって

いる。中でもゾーンAの人口減少が著しく、近年、都市再生プログラムにより右肩上がりに転じてはいるものの、1970年からの40年間で65%も減少している。（図-3）

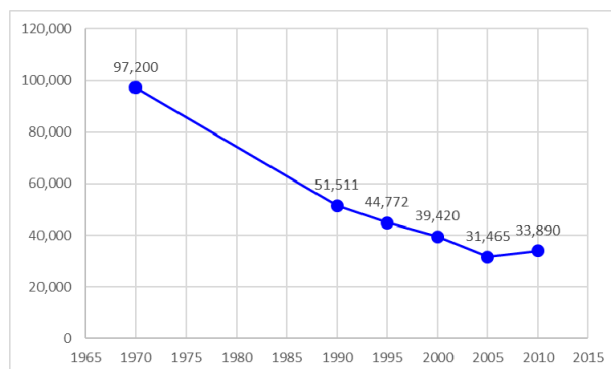


図-3 旧市街ゾーンAの人口動態（INEGI統計を基に筆者作成）

地区別の人口密度に注目すると、1970年当時、旧市街の比較的広範囲にわたって高密度な居住地域が広がっていたのに対し、2000年には一部の地区を例外として、全体的に人口密度が大きく減少していることが分かる。

（図-4）旧市街は、植民地時代から続く長い歴史の中で、独特の生活様式と文化を育んできたが、人口減少の著しい中部・西部・南部では、コミュニティの弱体化に伴い、地域固有の風習や伝統が徐々に失われつつあることが推測される。

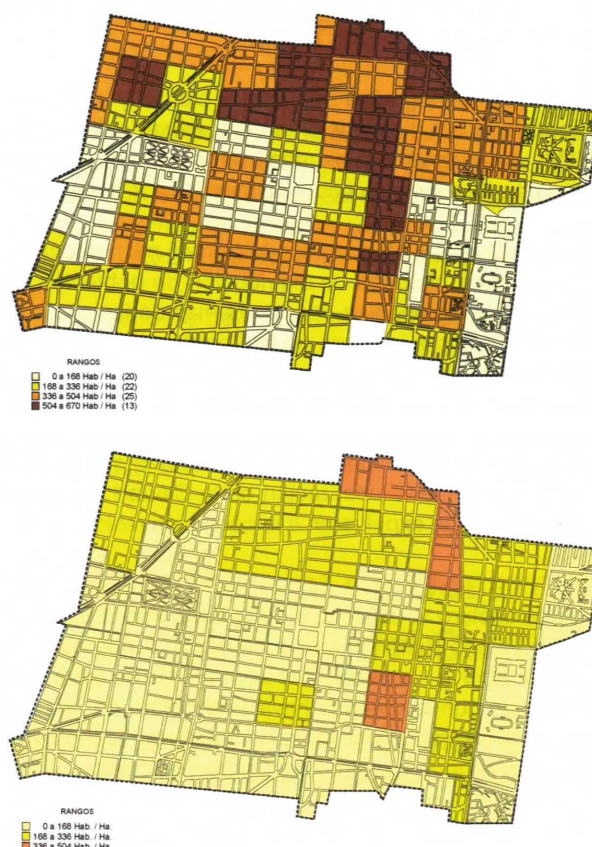


図-4 ゾーンA・Bの人口密度分布の変化（Suárez, 2009）

一方、ベシンダー（Vecindad：馬蹄形の低層集合住宅）やアパートなどの高密度な居住空間に、低所得者層を中心とした人々が多数暮らしていることも看過できない。登記上「住居利用あり」とされる不動産の分布に着目すると、北部、東部に住居利用が多いことが分かる。

（図-5）これらの地域では、植民地時代から連綿と受け継がれてきた地縁的なつながりや地域固有の文化・伝統が色濃く残っていることが予想される。



図-5 ゾーンAで「住居利用あり」と登記された不動産の分布
(PIMCHCDMX, 2011)

(2) コミュニティの構造

メキシコには、日本で言うところの町内会や自治会のように、組織化された地縁団体が存在しない。このことは、地域住民による地縁的なつながりや互助活動が、組織としての場を通じてではなく、広場や街路といった公共空間、及び教会をはじめとする公共施設において醸成されていることを暗示している。

旧市街の総合的な現状分析と再生に向けた施策提言を行った「セントロ地区都市発展プログラム」（Programa Parcial de Desarrollo Urbano del Centro Histórico, 2000）は、ゲレロ地区、メルセー地区、ラグニージャ地区、テピート地区、グラナディータス地区、ビスカイナス地区の6つの主要な居住地区において、コミュニティの核となる25の広場の存在を指摘している。（図-6）



図-6 主要な居住地区とコミュニティの核となる広場の分布

旧市街に暮らす人々の多くが、ベシンダーやアパートといった狭小かつ高密度な居住環境に置かれていることから、広場をはじめとする屋外空間は、地域住民の生活空間の延長として様々なアクティビティを受容している。日常的には、近隣住民のコミュニケーションや子供たちの遊び場としての機能するとともに、非日常的には、伝統行事や地域住民の祝い事など、様々なイベントが互助・共助の下に開催されることで、社会ネットワークを生み出す場として機能してきた。

また、広場と並びコミュニティの核となる施設として、教会や礼拝堂といった宗教施設の存在が指摘される。カトリック教国であるメキシコでは、復活祭やクリスマスをはじめ、守護聖人の祭りや地元住民の結婚式まで、実に多様な行事が各教会で開催されており、地域の社会ネットワーク醸成の場として機能している。元来、旧市街の広場の多くが、教会の前庭（Atrio）に起源することから、歴史的には教会と広場がセットでコミュニティを醸成してきたと言える。

なお、メキシコ・シティ旧市街の歴史は、修道院の歴史であると言っても過言ではない。19世紀半ばには、市街地の約80%に相当する土地を修道院が所有していた。その後、ベニート・ファレス大統領のレフォルマ政策によって修道院の財産が国有化されると、数多くの宗教施設が都市開発のために取り壊されるとともに、公共施設へと転用されたが、いまなおゾーンAには30の教会、ゾーンBには21の教会が存在し、周辺住民の生活と密接な関係を結んでいるものと考えられる。

3. 復活祭と十字架の道

(1) 復活祭とまちの表情

国民の約96%をカトリック信者が占めるメキシコでは、復活祭とクリスマスの期間、教会や広場において様々な祭事が執り行われる。また、スペイン人によってもたらされたカトリックと先住民の土着信仰が融合し、独自の宗教観を築き上げてきたメキシコでは、死者の日の祭事や各教会に奉られている聖人の祝賀行事が、教会やまちなかの広場や街路で行われている。

イエス・キリストの復活を祝う復活祭は、クリスマスと並び、カトリック信者にとって最も重要な宗教行事の一つである。クリスマスが教会内のミサと家庭内の晩餐を中心とした屋内型のイベントであるのに対し、復活祭は一週間にわたり教会の内外を舞台に様々なアクティビティが発生することから、まちの表情にも様々な変化が生まれる。復活祭では段階的に、以下の祭儀が執り行われる。

○ 枝の主日 (Domingo de Ramos)

イエス・キリストのエルサレム到着を、オリーブやナツメヤシの枝を手にした群衆が、自分の衣服やこれらの枝を道に敷き詰めて迎え入れたことを祝う行事である。各教会の前に藁飾りや花束を売る露店や売り子が出現し、まさに復活祭の始まりを告げる。(写真-1)

○ 聖木曜日 (Jueves Santo)

最後の晩餐において、イエス・キリストが弟子たちの足を洗ったことを祝う行事である。各教会では、最後の晩餐と洗足式の儀式が行われるのに併せ、教会の内外にパンや水、花束の売り子が出現し、まさに復活祭が本格的に到来したことを告げる。一部の教会では、ロメリア (Romería) と呼ばれる夜市が開催され、教会前の広場は一夜限りの賑わいを見せる。(写真-2)



写真-1 枝の主日のまちな様子 写真-2 聖木曜日のロメリア

○ 聖金曜日 (Viernes Santo)

イエス・キリストの受難と死を迎え入れる行事である。各教会では、朝から昼にかけて「十字架の道」 (Vía Crucis), 夜間に「静かなる行進」 (Procesión del Silencio) の巡礼が行われる。

十字架の道は、イエス・キリストがユダヤ総督の裁判にかけられてから、ローマ政府によってゴルゴダの丘で磔付けにされるまでの道程を追体験するものである。また、静かなる行進は、イエス・キリストの亡骸を模した像などを担ぎながら、十字架の道と同じルートを行進し、イエス・キリストの受難と死を悲しむものである。

いずれの巡礼も、各教会を帰着点としてまちなかに設置された留 (Estación) と呼ばれる祭壇を巡るのが伝統となっており、連休で人通りまばらなまちな風景が、一変してハレの場へ転じる。また、十字架の道が、賛美歌の斉唱や演劇を含む華やかな行事なのに対し、静かなる行進は静寂の中、太鼓の音だけが鳴り響く厳かな行事であることから、一昼夜でまちな雰囲気が大きく変化することとなる。(写真-3・4)



写真-3 十字架の道の様子 写真-4 静かなる行進の様子

○ 復活前夜 (Sábado Santo)

イエス・キリストの復活に想いを馳せる行事である。各教会において夜間、光の祭儀とことばの典礼、洗礼の儀式、感謝の典礼が行われる。この内、イエス・キリストの新たな命を迎える光の祭儀は、一部の教会において、教会前の広場や街路で復活のろうそくに祝福の火を灯すこともあり、一連の儀式をもってまちは祝福に包まれることとなる。(写真-5・6)



写真-5・6 光の祭儀の様子

○ 復活の主日 (Domingo de Pascua)

イエス・キリストの復活を祝う行事である。各教会においてミサが行われ、これをもってまちは日常を取り戻すこととなる。

(2) 十字架の道の巡礼

以上、復活祭の期間、まちな表情がどのように変化するのか、概観した。一連の行事の中でも、まちな雰囲気特に大きな影響を及ぼすのが、聖金曜日に行われる十字架の道である。他の祭儀が基本的に教会内部や教会周りの空間で執り行われるのに対し、十字架の道では、地域住民を中心とする大勢の参加者が、まちな各所に設置された留を巡り、まちを練り歩くことから、教会を核とするコミュニティのあり方がまちに表出する一大イベントであると言える。

十字架の道は、元来、エルサレムを訪れた巡礼者が、イエス・キリストの辿った道りを再現し、宗教的な体験を得る信心業として始まったものである。その後、17世紀末のヨーロッパにおいて、贖罪のための行進としての意味合いが付与されるとともに、今日見られる巡礼の形式が整えられたことで、植民地を含む世界各地へと展開していった。

巡礼の内容は、基本的には各国共通であるが、国や地域によって多少の違いが見られる。今日メキシコで見られる一般的な形式は、表-1に示す14のイベントごとに設定された留を巡り、イエス・キリストの受難を追体験するというものである。巡礼の参加者は、賛美歌を斉唱しながら留の間を移するとともに、留の前で歩を止め、神父から各留にまつわるストーリーの説法を受ける。(写真-7・8) また、一部の教会では、参列者が十字架の道にまつわる登場人物に扮し、演劇を交えることもある。

表-1 各留のイベント

番号	イベント
1	ピラトに裁かれ、死刑判決を受ける
2	イエスが十字架を担ぐ
3	イエスが転倒する（1回目）
4	悲しむ母マリアに遭遇する
5	キレネ人シモンがイエスを助け、十字架を担ぐ
6	ペロニカがイエスの顔を拭く
7	イエスが転倒する（2回目）
8	嘆き悲しむ婦人達に語りかける
9	イエスが転倒する（3回目）
10	衣服を剥ぎ取られる
11	十字架に架けられる
12	イエスの死
13	十字架から下ろされたイエスを母マリアが抱える
14	イエス、埋葬される



写真-7 巡礼の様子



写真-8 留における説法

なお、かつては各教会の周辺に暮らす信徒が、自宅前等に留となる祭壇を設置し、教会を帰着点としてまちなかを周回するのが一般的であったが、1970年代から急速化する旧市街の空洞化を受け、伝統的な形での開催が年々難しくなっている。（写真-9）教会によっては参加者の減少に伴い、祭壇の設置場所の確保や飾り付け等の準備が難しくなり、祭壇を簡素化するケースや規模を縮小して祭壇なしで行進するケース、教会内で実施するケースも増えてきている。（写真-10）



写真-9 伝統的な留の祭壇



写真-10 簡素化された留

4. 十字架の道に見るコミュニティのかたち

本論では、旧市街の各教会が今なおコミュニティの核として機能しているとの仮説の下に、コミュニティのあり方が都市空間に表出する出来事として「十字架の道」

に着目し、Humanscape（人の景）の観察を通じて、コミュニティのかたちを読み解くを試みる。

(1) 現地調査

2014年4月初旬、事前調査として旧市街ゾーンAとその周縁部に位置するカトリック教会43ヶ所を対象に、2014年度の復活祭について、十字架の道の開催予定を聞いて回った。その結果、24ヶ所の教会がまちなかで、12ヶ所の教会が教会内で、十字架の道を開催することを確認した。（図-7）なお、24ヶ所の教会の内、Loreto・Santa Teresa・San Sebastiánでは3教会合同、San José・Guadalupe、及びEspíritu Santo・La Concepciónでは2教会合同の形で、十字架の道を開催することとなった。

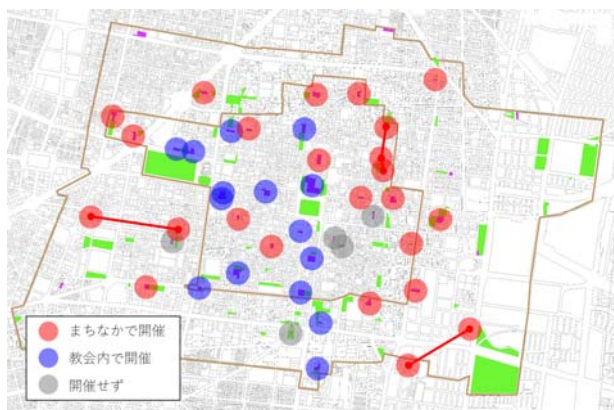


図-7 2014年度の十字架の道の開催状況

2014年4月18日の聖金曜日、まちなかで十字架の道を開催をする24ヶ所の教会、20件の巡礼を対象に、本調査を実施した。各教会の巡礼に1～4人の調査員が随行し、巡行ルート、留の設置場所と形状、参列者の数、演出の様子など、巡礼の様子を記録した。（写真-9）

なお、調査当日の午前9時半頃、比較的揺れの大きな地震が発生した。これを受け、Loreto/Santa Teresa/San Sebastiánでは、巡行ルートを急遽変更し、5～14番目の留を全て同一の場所で行ったが、巡行ルートの分析には、当初予定していたルートを用いるものとする。



写真-11 本調査の様子

(2) コミュニティの領域

十字架の道では、各教会に帰依する信徒が自宅前に留となる祭壇を設置するのが基本であるため、巡行ルートは各コミュニティの領域と密接な関係にあると言える。そこで、各教会の巡行ルートと留の設置場所をマッピングし、各コミュニティの領域を把握した。（図-8）

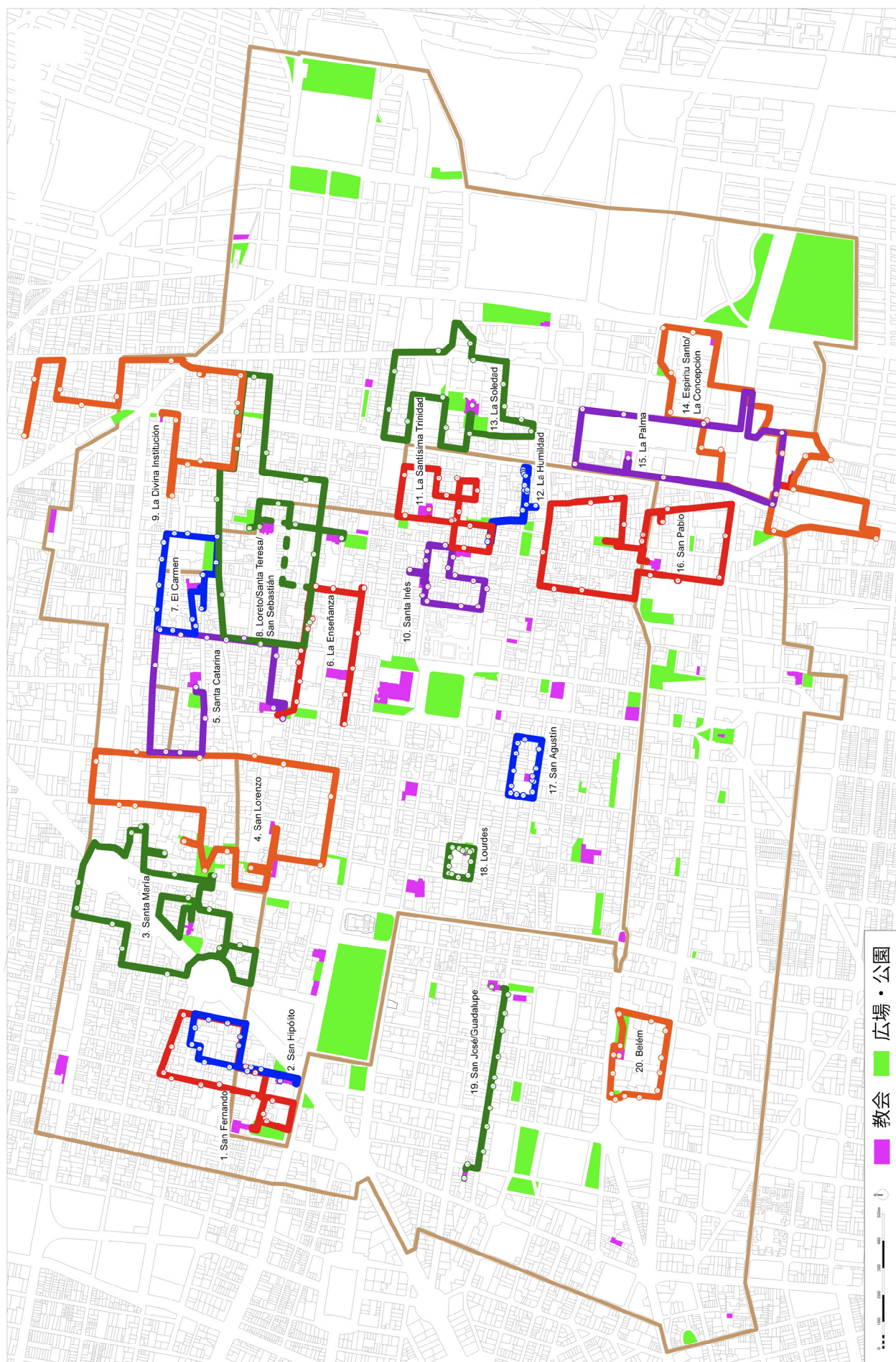


図-8 各教会における巡礼のルートと留の場所

巡行ルートに注目すると、概ね教会を発着点として周辺を一巡する形が基本であった。また、出発点と帰着点を別々の場所に設定しているSanta CatarinaとLa Enseñanza、La Divina Instituciónにおいても、周回に近い形でルートを設定していたことから、基本的にはコミュニティ全体を巡回するような形で巡行ルートが設定されていることが分かる。一方、San José/Guadalupeのように直線的なもの、La Humildadのように同じ道を往復し、面的な広がりを見せないものも散見された。

巡行ルートの面的な広がりに着目すると、居住人口の多い北部や南東部に、比較的圏域の大きいコミュニティが存在することが分かる。圏域の大きいコミュニティでは、いずれも広幅員の主要幹線道路をまたぐ形で巡行ルートを設定していたことから、通常、地縁的つながりの断絶要因と考えられる空間的な都市のエッジが、宗教的なコミュニティにとっては必ずしも断絶要因とはならないことが分かった。

各教会の巡行ルート間の関係に着目すると、まず、各教会の巡行ルートが一部重なることはあっても、巡行ルートによって囲まれた領域の重複はほとんど見られないことから、教会を核としたコミュニティの圏域が、基本的にはそれぞれ独立したものであることが分かる。一方、San FernandoとSan Hipólito、及びEspíritu Santo/La ConcepciónとLa Palmaの間では、巡行ルートによって囲まれた領域の一部重複が見られたことから、これらの地区では異なる教会に帰依する信者が混在していることが読み取れる。

また、San FernandoとSan Hipólito、及びSanta CatarinaとLoreto/Santa Teresa/San Sebastiánの間では、異なる教会の巡礼が一部の祭壇を共有していたことが分

かった。このことから、教会を核としたコミュニティの間に必ずしも明快な線引きが存在するという訳ではなく、同一の世帯や建物の中に、複数の異なる教会に帰依する信徒が存在することが読み取れる。

(3) コミュニティの規模

参列者の数は各コミュニティの規模を示す主要なバロメーターである。各教会の参列者の推移を見ると、概ね留を進むごとに参列者の数が増加する傾向が分かる。

(図-9) これは、熱心な信徒がスタート地点から巡礼に参加するのに対し、自宅付近等待機し、途中から参加する信徒が少なくないことを表している。こうした傾向は、行列の延長が長く、面的な広がり大きな巡礼において特に顕著に見られた。

本稿では、コミュニティとしての規模を推定するにあたり、最大時の参列者数と巡行ルートの延長に着目し、これを図-10にマッピングした。

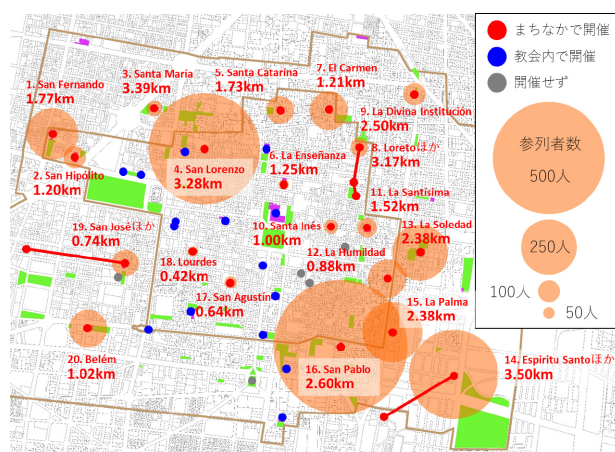


図-10 各巡礼における最大時の参列者数と巡礼ルートの延長

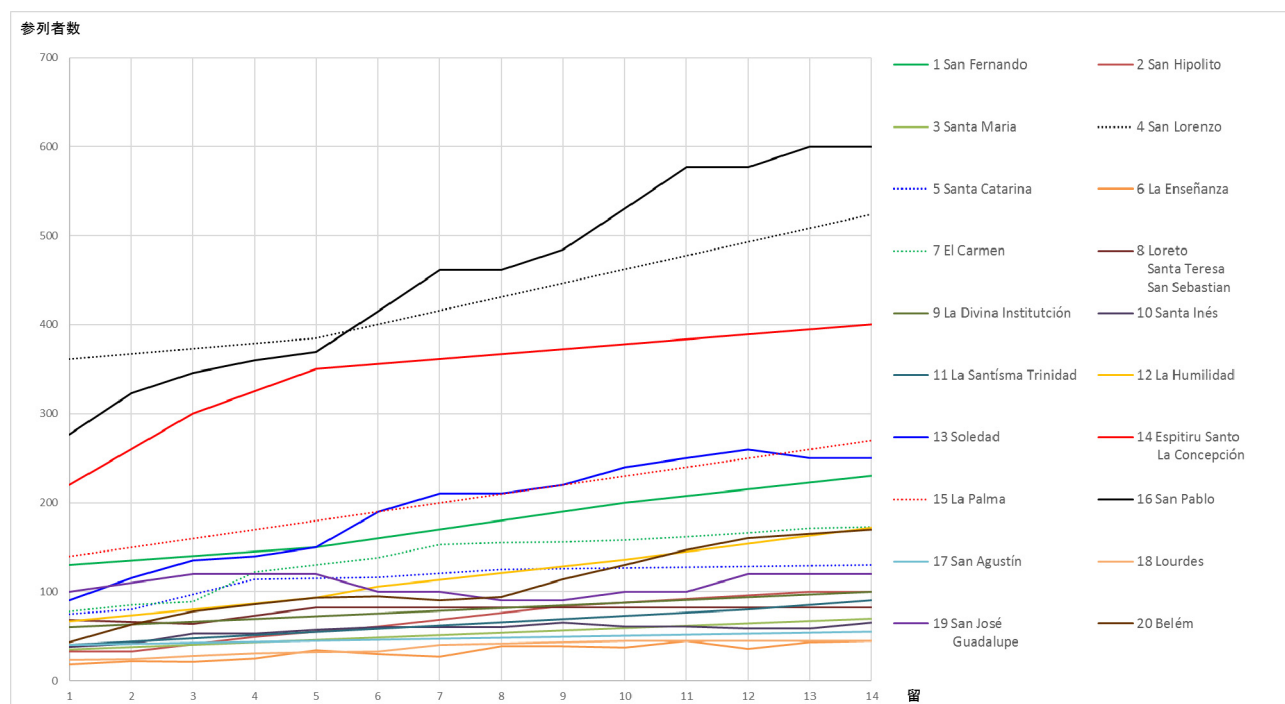


図-9 各巡礼における参列者数の推移

なお、公的機関やオフィス、商業施設が比較的多く立地する中心部から南西部にかけての一带では、いずれの巡礼も100人未満の小規模な行列であることから、非常に小規模なコミュニティが点在していることが分かった。また、西部には、San Fernando, San José/Guadalupe, Belénを核とする中規模のコミュニティが存在することが確認できた。

十字架の道の開催方法について、14ヶ所の留を順番に巡るということ以外に、特に決まったルールが存在する訳ではない。留の設置場所や祭壇の装飾、演劇の有無など、具体的な巡礼の内容は各コミュニティの判断に委ね

また、露店が常設されている旧市街北部・東部の一部の街路では、露店設備の内部や前面を利用して、留を設

250

けているものが見られた。（写真-13）これらの地域では、地域住民や沿道商店主のみならず、路上で商売を営む露店商も、教会を核とするコミュニティを構成する重要なメンバーであることが分かる。

なお、演劇を行う一部の巡礼では、序盤や終盤の留を広場上に設け、広場を舞台に演技を繰り広げていた。



写真-12 パティオ内の留



写真-13 露店内の留

○留の形式

留の形式は、1) 祭壇あり（固定式）、2) 仮設の祭壇、3) 祭壇なしの3タイプに分類することができる。

伝統的には、信徒が自宅前などに固定式の祭壇を設置するのが通常であるが、祭壇を設置するための人員や予算等の制約により、仮設的な祭壇を設けるものや、祭壇を設けないものも散見された。

La EnseñanzaとLa Palmaでは、沿道の住居利用が乏しく、祭壇の設置に協力してくれる人を確保できなかった一部の区間について、小さな台と布を持ち運び、留に到着する度に仮設の祭壇を設置していた。（写真14）

また、コミュニティの規模が比較的小さい南西部の教会の内、San Agustín, Lourdes, Belémでは全ての留、San José/Guadalupeでは一部の留において、祭壇を設けず、各留を示す絵を掲げる形で対応していた。（写真15）



写真-14 仮設の祭壇



写真-15 祭壇なしの留

○祭壇の装飾

祭壇の装飾は、各コミュニティの宗教観や信仰心の強さ、結束力を表すバロメーターの一つである。装飾のタイプは、装飾の様式と度合いに基づいて、A) 幕・紙飾り・草花、B) 紙飾り・草花、C) 草花のみ、D) 簡素な装飾、E) 装飾なしの5つに分類することができる。

全体的な傾向として、参列者数の多い巡礼ほど、AタイプやBタイプといった壮麗な装飾が見られるのに対し、参列者の少ない巡礼では、DタイプやEタイプをはじめ、装飾も簡素なものとなる傾向が見受けられた。（写真-

16・17）このことから、規模が大きなコミュニティほど、構成員の信仰心・献身性が強い傾向にあることが伺える。一方、同じ巡礼の中でも、留によって装飾の度合いに差が見られることから、構成員によって信仰心に温度差があることが分かる。



写真-16 壮麗なAタイプ



写真-17 簡素なDタイプ

装飾の色彩に着目すると、紫・白を基調としたものと、赤・白を基調としたものに大別された。いずれの巡礼においても、概ね紫・白で統一していたが、いくつかの巡礼では異なる色調の混在が見受けられた。キリスト教の典礼において、紫は苦難・悲しみ、白は喜び・純真さ、赤は情熱・慈悲を象徴する色彩であることから、これらの色彩の組み合わせ方に、キリストの受難と死に対する各コミュニティの集合的イメージが伺える。

なお、カトリックの復活祭とは本来関係のない、Virgen de GuadalupeやSan Judas Tadeo, Niño Dios, Nuestra Señora de Zapopan, Santo Niño de Atochaといった聖人の像や宗教画を飾る祭壇も少なくなかった。（写真-18）また、まちなかや集合住宅のパティオに設置された聖人の祠に併設する形で、祭壇を設置するケースも散見された。（写真-19）San Hipólito, La Humildad, La Soledadでは、聖人と関連した装飾が多数見られたことから、これらの地域では、先住民の土着の信仰とスペイン人によって持ち込まれたカトリックが融合した独特の宗教観が、今なお深く根づいていることが伺える。



写真-18 聖人の像・宗教画



写真-19 祠に併設された祭壇

○巡礼の演出

巡礼をドラマチックに演出する最もポピュラーな方法が、キリストの受難と死をテーマとした演劇である。研究対象20カ所の内、6ヶ所の教会において演劇が行われていた。十字架の道の演劇は、地域の子供が演者として参加するのが慣例となっていることから、演劇の開催が見られた巡礼は、いずれも演者を確保できる規模の大き

なコミュニティであった。なお、特に規模の大きなSan Lorenzo, Espíritu Santo/La Concepción, La Palma, San Pabloの4カ所では、演劇の真実味・迫真性を高めるべく、子供たちに加え、大人たちも演劇に参加していた。（写真-20）演劇の実施には、演技の練習や衣装・装置の準備が必要とされることから、規模の大きなコミュニティほど、互助・共助の精神が強いことが読み取れる。

また、演劇を行わない場合においても、7カ所の巡礼においてユダヤ人を模した参加者の仮装が見られた。演者の衣装や参列者の仮装に加え、約半数の巡礼において、巡礼をリードする部隊が揃いの祭服を身に纏っていたほか、企画の中心となるメンバーが揃いのTシャツを着用するケースも散見された。（写真-21）こうした衣装の統一からは、行事に対するコミュニティの参加意欲を伺うことができると言える。



写真-20 迫真の演技



写真-21 衣装の統一

また、規模の大きい巡礼では、巡礼を演出する独特の仕掛けや工夫が見られた。例えば、San Lorenzoでは、各留のイベントを示す画を貼り付けた木製の大きなギリシャ十字を各祭壇に設置し、留を巡るごとにこれを回収し、行進するという演出を行っていた。また、最も規模が大きなSan Pabloの巡礼では、生花の花弁を散布し、巡礼のルートを鮮やかに彩る演出を行うとともに、巡礼の最初と最後に広場を使った大掛かりな演劇を行っていた。（写真-22・23）



写真-22 生花の散布



写真-23 大掛かりな演劇

5. おわりに

本稿では、メキシコ・シティ旧市街の各教会において復活祭（Semana Santa）の聖金曜日に行われる十字架の道（Via Crucis）を対象に、Humanscape（人の景）の調査・分析を通じて、教会を核とするコミュニティのかた

ちを読み解くことを試みた。調査・分析の結果、巡礼のルートや規模、留の設置場所と形式、祭壇の装飾、演出の工夫などから、各コミュニティの領域と規模、性格を読み解くことができた。

メキシコ・シティ旧市街におけるコミュニティの実態に関する既往研究が極めて乏しい中、教会を核とするコミュニティの構造・特徴を明らかにしたことは、非常に意義のある成果であると言える。また、試論の段階ではあるが、Humanscapeの調査・分析を通じたコミュニティ研究の方法論を提示することができた。

今後の展開として、今回は教会を核としたコミュニティを対象とした調査・分析を行ったが、教会と並ぶ重要な社会ネットワーク形成の場である広場に着目し、広場を核としたコミュニティを対象とした調査・分析を行い、両者の相互関係を明らかにしたいと考えている。

また、いくつかの特徴的な巡礼について、参列者に対するアンケート調査を実施し、コミュニティ内の人的ネットワークや宗教観を明らかにするとともに、主要メンバーに対するヒアリング調査を実施し、祭壇の設置場所や装飾の方法、演劇の構成等、巡礼の内容が決まるまでの検討プロセスを明らかにすることで、社会集団としてのアイデンティティが集合的心性に従いながら、空間へ表出するダイナミクスを明らかにしたい。

なお、今回の研究では、Humanscapeを地域のアイデンティティを読み解くためのツールとして用いたが、将来的にはこれを豊かな都市空間を実現する上でのキーコンセプトとして用いたいと考えている。都市空間の背後にある地域の社会構造や場のデザインを通じて質の高い公共空間を実現する方法論として、Humanscape Urbanismの構築に取り組みたい。

謝辞：本研究を行うにあたり、メキシコ・シティ旧市街の教会関係者や近隣住民の方々には、現地調査の実施にご理解・ご協力頂いた。また、友人・知人の皆様には、ご多忙の中、現地調査にご協力頂いた。この場を借りて、厚く謝意を表する。

参考文献

- 1) 西村亮彦：Humanscapeから読み解く都市空間の公共性－メキシコ・シティ旧市街フアン・ホセ・バス広場を例に、景観・デザイン研究講演集, no. 11, p. 167-176, 2015
- 2) Borja, J.: La ciudad es la calle. Espacio público y centros históricos como test de la ciudad democrática, Universidad Autónoma de México, México DF, 2010
- 3) Suárez, A.: La función habitacional del centro historico y el desafío de su regeneración, Universidad Autónoma de México, México DF, 2010
- 4) Programa Paricial de Desarrollo Urbano Centro Histórico del Programa Delegacional de Desarrollo Urbano para la Delegación Cuauhtemoc, Gobierno del Distrito Federal,

México DF, 2000

- 5) Gehl, J.: How to study public life, Island Press, Washington DC, 2013
- 6) 吉見俊哉：都市のドラマトゥルギー，弘文堂，1987